今の所、世界の命運は俺にかかっている続

流石

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今の所、世界の命運は俺にかかっているの続きと言うか外伝です。プロットとか何もないです……

感想とかにシチュがあれば偶に参考する可能性大です……あと不定期更新ですのでよろしくお願いします

目次

一話　私と私　1
二話　未来の黄と今の赤　11
三話　約束　23
パラレル時空ラブコメ編
黄ノ章1　33
黄ノ章2　44
黄ノ章3　52
黄ノ章4　63
真第一話　75
黄ノ章　終　86

一話　私と私

あの日、彼は全てを選ぶ選択をした。それは途方もない選択で簡単な選択ではない、難しくて、尋常ではない選択。私は、私達は彼に一生ついて行くつもりだ。

例え未来の自分たちを彼が嫁にしたいと言っても……ギリ、許す。彼が心の底から私たちを愛すると言う事は分かってるし、その愛が霞んだり弱くなったりすることはない事くらい知っている。疑いようがないのだ。

だが……

「あ、あの、当たってます……」

「ふふふ、当ててるんですよ?」

未来の私が彼を独占すると言う事態は非常に面白くない。ソファで私の彼氏を独占しているのは銀堂コハク。私とは違い髪の長さは肩くらいまで銀髪の碧眼。三十路のくせに肌が若々しい。その癖に色気だけは一貯前に出ている。未来の私であり、iカップというふしだらな物を彼に当てる頭のおかしい女。

三十路のくせに……

私は面白くないので反対側に座る。そのまま彼の腕に絡みついて目をいつもより見開いて声のトーンを上げて甘ったるい声を出す。

「もう、私のこと忘れないでくださいよ」
「わ、忘れてませんよ」
「未来の私ばっかりカマッテ……胸がそんなにいいんですか?」
「いや、その……そうなんですけど……コハクさんのことを忘れた訳じゃないです。その、えっと……」

アタフタする彼が可愛い。そして、自分に照れてくれて愛を伝えようとする彼が愛おしくてたまらない。

だけど、未来の私は面白くないようだ。三十路のくせに頬を膨らませて、私に嫉妬の視線を向ける。彼が今現在は私の方を向いて彼女には背を向けている。だから彼女は彼の脇の下から手を回して顔を彼の耳元に、そして豊潤な化け物突起を彼のせなかにこれでもかと押し付けた。

ビクッと彼の体が跳ねる。背中の感触と耳奥に届く彼女の息に彼の全部が彼女に一瞬で持っていかれる。そのまま誘惑するように彼女は囁く。

「私なんかより、ぴちぴちの過去の私の方が好みですか？」
「あああああ、そそそそそのの……」
「ふふ、耳弱いの知ってますよ？　貴方の弱い所も強い所も、敏感な所もの可愛い所も全部しってます……」
「あ、あんまりからかわないで貰ってい、いいですか？」
「すいません……あまりに可愛いから……食べちゃいたい」
「ッ!!!!」

再び彼の体がびくりと跳ねる。彼女は狩猟的な目で彼を見る。その姿に私はまるで自信を見ている気分になった。

そんなの当たり前だ。だって、彼女は未来の私なんだから。だけど、本当に今現在の私をそのまんま見ている気分なのだ。

三十路、なのに大人なのに子供の様だった。まるで時間がずっと止まっていたかのような……彼女の雰囲気。外見は大人だけど中身は子供のまま。

その時に分かった。彼女は十六夜君の生きてない時間を生きていたが、彼女の時は彼が死んでからずっと止まったままなんだと。

すんなり分かった。きっと自分もそうなるだろうから。そして、彼に出会ってようや

く時間が動き出している。
　きっと、妹のクロコもそうなんだろう。ずっと悲しみの中で時間が止まったまま。だから、別世界から来た彼が選んでくれたことが嬉しくて自分のものにしたくてたまらない……愛を深めたくてたまらない。
　危険だ……この人は……いや、彼女達は……
　十六夜君が、私の彼氏が……ドロドロに溶かされて喰われるかもしれない……
　そう思いたったら行動せずにはいられなかった。彼女から無理やり引き離して彼の顔を胸に埋めさせる。そのまま私は彼女を睨んだ。この人は私のもので貴方には渡さないと明確に意思表示をした

「んんっ!!」
　彼が話せないくらいに埋める。ちょっと苦しいかもしれなけど我慢してもらおう
「この人は、私の大事な人です……あまり、からかわないでください……おばさん」
「カッチーン……まだ、おばさんじゃないですよ……」
「おばさんですよ、この三十路」
「……おばさんじゃないです」
「おばさんです」

「若いです!! まだ、全然若いです！」
「全然、若くないです！」

自分と自分が言いあっている。どこか複雑な感情にもなってしまうがそれは置いておく。
「……はぁ、過去の私におばさんと言われるのは変な気分ですね……同じ私なんですから仲良くできませんか？」
「そんな自分が無害と言って、油断をさせて私が居ないところで抜け駆けするつもりなのはお見通しです」
「はぁ、私は仲良くしたいのに変な疑いをかける……さらに、些か貴方の話は論理に欠けていますね。全く……何を根拠に」
「私ならそうするからです」
「……論破されてしまいました」
「やっぱり……いいですか？ 夜にベッドに入り込むとか絶対にやめてください……あと誘惑も禁止です！」
「……はーい」

そっぽを向いて手で髪先をくるくるしながら彼女は気の抜けた返事をする。絶対に私にとの約束を破るなコイツ……私だからこそ彼女の動きが分かる。

恐らく精神年齢もかなり近い。外見は正直言うと……私の理想ともいえるほどいい感じがする。スタイルもいいし、顔は大人な感じで私より……色気がある……認めたくないけど……

そして、きっと彼女は十六夜君を私より知っている。だから、きっと彼女は全部を使って十六夜君を獲りに来る……

不安だ……このまま放置なんてしておけない。よく、本当の敵は自分とか言うけどその通りだ。

彼女から、自分から目が離せない……

「そろそろ、十六夜君を離してあげたらどうですか？」

「あ！　ご、ごめんなさい！」

「いえ、寧ろご褒美です」

息がしにくかっただろうに彼は親指を立ててぐっとマーク。最近の彼は色々吹っ切

れたと言うか開き直ったと言うか以前より覚悟が極まっている感じがする。そんな十六夜君も勿論素敵なのだがそう思ってるのは私だけじゃない。

火蓮先輩、アオイ先輩、萌黄先輩、クロコ。特に妹のクロコが結構、ベッドに入ったり誘惑したりするから妨害をしたりしていたのにここに来て未来の私達……戦争だ……これは愛の戦争……

彼も変にオープンな所があるからそこを誰かに付け込まれたりするかもしれない。

私はハーレムを認めてはいるが一番でありたいことを放棄したわけじゃない。彼の初めてとか一番とか、目指し続ける。抜け駆けだってしたい。

ライバルであり仲間が四人から九人に増えた……ああ、もう考えることがいっぱい!!!!!!

落ち着け、取りあえず未来の私をマークしよう。

◆◆

まぁ、大体、過去の私が考えていることは分かる。だからと言って私が手を抜いたりすることはない。

何度願ったか分からない彼との再会。彼との幸せの時間を私達は願った。だけど、彼は帰らないといけないから私達は諦める選択を選んだ。

そして、彼が迷ったり少しでも彼の心残りがないように背中を押した。彼ならきっと気にしてしまう、優しいから悩んでしまう。それを少しでも軽減したかった。

ここに残って欲しいと私も言いたかった……

だけど、彼には幸せになって欲しかった。ここより元の世界の方が幸せになると思った。

だから、言わなかった。

でも、私のそんな気持ちなんて彼は分かっていた。彼は帰る足を止めた。

そして、私達に来いと言った。私達も幸せにしたいと、未来の私達も愛してしまったと。だから、自分と来いと言った。

その答えがどれほど、私が、私達が嬉しかったか。それだけは私達は知らないだろう。

分からないだろう。

十四年、私達がどれだけ焦がれたか、愛おしかったかそんなの絶対に分からない。

彼がもう一度来て選んでくれた。それでどれほど愛が溢れたか彼女達は知らない。

我慢なんて出来るはずがない……溜まりに溜まったこの想いが止められるはずがない。

正直、過去の私達には申し訳ないと思っている。いきなり三十路を超えたおば……お姉さんが五人も彼の恋人として現れて彼との時間も減ってしまう。それが辛いのは分かる。本当に申し訳ない。

でも……彼が私達も幸せになって欲しいと言うんだから仕方ないですよね？

「十六夜君はもっと女性に免疫を付けましょう。ノーと言える男になりましょう！」

「が、頑張ります」

「私を是非練習台として使ってください」

目のまえで過去の私が彼と話している。彼女は私の想いに気づいて妨害してくるつ

もりだ。

本当にごめんなさい。私……。

私は欲張りなんです。貴方もそれはよく知っていますよね？

すいません。プロットとか全く無いです。完全なノリと勢いです。感想とかに流される可能性大です。欲しいシチュエーション言っていただいたら描くかもしれません……

あと、不定期更新です……

二話　未来の黄と今の赤

私は夕ご飯の買い出しに未来の萌黄と一緒に来ている。

言わずもがな、居候が一気に五人も増えたので食事の量も増える。そうなると買い出しの量も増える。だから二人係で行くことになり、元々当番であった私に未来萌黄が付いてきたのだ。

「今日、夕飯結構豪勢にするだよね？」

「そうらしいわよ」

いや、コイツ……良いからだしてるわね……。私より全然魅力的……

引き締まった足、大人な感じな雰囲気。可愛らしいパツキンの髪と眉毛と目。何より、何より……胸!!!

萌黄、益々大きくなってなんなのよ!!!　未来の私見たけど、Ｂじゃん!!　なんでみんな大きいのに私だけ小さいのよ!!　意味わからん!!!

せめて、？いや？くらいは行って欲しかった……

「えっと、何か凄い視線を感じるんだけど」
「なんでもないわ」
「あ、そう？」

くっ、まぁ良いわ。ヒロインが巨乳だからって、三十路を超えてるんだから。アドバンテージは私にあるわ……よね？

「えっと、エビと豚ロース肉、鳥もも肉……」

萌黄がメモをすらすらと読み上げてカゴにテキパキと買うものを入れていく。彼女が漂ってくる良妻臭。油断ならないわね

色々買いながらスーパーを回っていると萌黄が呟く

「火蓮ちゃんとお買い物なんて久しぶりだな」
「そう……」

そう言えば、未来の皆は十六夜がいなくなってバラバラになって悲しみの毎日を生きていたって聞いたわね。

こういう時ってなんて言えばいいのかしら

「あ、ごめん。気、遣っちゃったよね？」

「いや……別に……」

「あー、なんかごめんね？」

「気なんて遣ってないわ……それより、買い物続けましょ」

こういう風にしか言えない私。自分の語弊力の無さが疎ましい。でも、彼女はちょっと笑った。

「そうだね……」

再び二人で歩き出すと彼女がふと足を止めた。

「ああー、お酒……飲みたい……」

彼女の視線の先には缶ビールやら、ワインやら、色々置いてある。お酒コーナー。そういえば成人してるんだからお酒くらい飲んでも不思議じゃないわよね。

私も飲むのかしら？

そう言えば未来の私って髪型変えてたわね……ショートヘアーでさっぱりはしてたけど。何で切ったのかしら。ツインテールって可愛いのに……でも、社会人になってツインテールは流石に無いのかしら……

今度……色々聞いてみようかな……

そんな事を考えていると目の前でお酒に目を奪われている彼女を思い出す。

「買ってもいいんじゃない？」

「いや、でもさ……いいのかな？」

「良いと思うわ。十六夜もそれくらいでどうこう言わないでしょ？」

「うーん……でも、未来から来て居候でお酒飲みたいって……」

三十路の萌黄も遠慮癖は変わってないのね。

「はいはい、どれ飲みたいの？」
「……その、この金色の奴……」
「これね……何本飲みたいの？」
「えっと……ご、五本……」
「結構飲むのね……あ、萌黄以外も飲みたいわよね？」
「そ、そうかもしれないです……」
「急に塩らしくなったわね……まぁ、これならワンケース丸々買った方が良いわね」
「そ、そうだね」
　ワンケース丸々買う事にして私がそれを持つ。萌黄だと色々遠慮するから私が率先して買わないといけない。
　魔力を上手いこと使うとこんなのも簡単に持てる。
「あ、その」
「気にしなくていいわ……今夜は、十六夜との再会とか色々祝って……このお酒で優勝したいんでしょ？」
「か、火蓮ちゃん……流石だよ！」
　涙を浮かべて喜ぶ彼女。お酒がよっぽど萌黄好きなんだなと思いつつ、私は買うべき

もの＋お酒を持ってレジに並ぶ。
　並びながら私は彼女に聞いた。
「お酒、美味しいの？」
「うん、凄く」
「へぇ……」
「多分、未来の火蓮ちゃんも飲んでると思うよ」
「そうかしら？」
「うん、きっと飲んでる」

　彼女は凄い自信満々にそう言った。勘なのかただの予想なのか。社会人として普通と言う概念的な物から判断しているのか分からない。彼女はそのまま理由を言った。
「だって、それくらいしかすることないもん」
「……え？　それって……」

　それ以上言葉が出なかった。そして、彼女も言ってしまったと後悔の眼をした。彼女はまたやってしまったと思いながらもこの雰囲気を霧散させるようにテンションを上げる。

「ああ、ほら！　前が開いたから早く会計しよう！」
「ああ、うん……」

私も適当に相槌を打って前に行く。商品券を出して値段を安く済ませて、エコバッグに荷物を詰める。
私は両手でビールのダースを持って、彼女は両手に膨らんだエコバッグ。

自動ドアを抜けて、外に出る。何だか、気まずい感じになってしまっている。彼女は無理に話題を作り私に話しかける。

「あー、お酒がどんな味が気になる？」
「まぁ……」
「お酒はね、まぁ、苦みの強い感じのものがあったり、それが苦手ならワインとか梅酒とか……えっと、一応言っておくけど味が気になっても飲んじゃダメだよ？」
「分かってるわよ」
「そう、だよね……」
「……無理に話を広げたりしなくていいわよ」

「え？」

「大人でも言いたくない事とか、辛い事とか、うっかりとかあるのは当然。泣きたい時もあるだろうし、無理に笑顔なんてしなくていい……大人だからとか、関係ない。萌黄は萌黄。それが未来でも今でも……上手く言えないけど……こう、何と言うか……遠慮すんな……ってことよ」

ああ、恥ずかしいぃ。こんな週刊少年系のセリフを息を吐くように言える十六夜ってメンタル凄いと彼の良いところを再認識する。

「ふふ、そっか……変わってないね。それにしても何という熱血溢れる言葉なんだ……火蓮ちゃんの熱血言葉を本にしたいって今割と本気で思った！」

彼女はクスっと笑って笑った。私は恥ずかしくて頬を紅潮してからかわれた気がしたからそっぽを向いた。

「火蓮ちゃんありがとう……僕、大好きだよ」

「そ……」
「あれ？　何か、不機嫌になってない？」
「なってない」
「いやいや、なってるじゃん」
「なってない」
「いや、」
「なってない」
「えー、ま、いいか」
「っ……ふふ」

何となくだけど、彼女とも仲良くなれる気がした。さっき、からかわれた仕返しに私は彼女もからかってやろうと思った。

「三十路ってなると、体が硬くなるって言うけどそこら辺どう？」
「三十路だけど体柔らかいよ。あと、年齢のこと言うの禁止」
結構ガチトーンで年齢のことを言うのを禁止された。

「ぴちぴちＪＫなもんで、気になっちゃうのよ。先の事が……さ」
「今両手が塞がってるから何もできないけど、空いてたらげんこつしてた」
「何か罰が古くない？　漂う三十路臭……」
「よろしい……あとで久しぶりの全身くすぐりをくらわしてあげる」

馬鹿話で盛り上がりながら、私達は帰路を歩く。ただ、三十路ネタはほどほどにしないと本気で怒られると私は感じた。

やはり、年は気になるのだろうか。私は全然気にならなけどそれは今が若いだけで未来の私は気になっているのだろうか。聞いてみよう。

何というか、自分と話すのって勇気がいるのよね。

「そう言えば、未来組ってこれからどうするの？　仕事とか」
「メルちゃんの実家の旅館手伝ったり、異世界で冒険者して食材稼いだり……？　身分証が出来ればこっちで仕事？」
「あ、決まってない感じなのね」
「うん……でも流石に働かないのはナシかな？」
「そうなんだ……十六夜ならニートでも余裕でオーケー出しそうだけど」

「甘えるのもほどほどにしないとさ。それに何かはやらないと人としてダメになる気がする」
「へぇー、考えがみそ……大人ね」
「今言い変えたのは百点」

こっちの萌黄も考え方がしっかりしてるわね。それと言い換えて良かった。途中で彼女の視線が鋭くなったのを見逃さなかったのだ。正直言うとちょっと怖かった。
年齢……からかいすぎるのダメ、絶対。本日二度目、そう思った。

そんなこんなで二人で歩いていると私達の前から唐突に冷たい風が吹き抜ける。まだまだ寒い季節であるなと私は感じる。

「寒いわね」
「そうだねー」
「ココア飲みたくならない？」
「うん……そうだ……あ、いや……」

彼女は一瞬同意したけど、撤回した。
「僕は……キャラメルフラペチーノかな?」
「洒落てるのね」
その日、私は萌黄の寒い時に飲みたい、好きな暖かい飲みものはキャラメルフラペチーノだと知った。

三話　約束

「ふんふーん、フフフーん」

私は気分よく鼻歌を歌いながらバッグに衣類を詰めていく。

なんと、なんと……十六夜が私との旅行を計画してくれたいたからだ。以前に約束した旅行。しっかりと覚えていてくれた十六夜。流石としか言いようがないわ。

しかも、今回は二人きり。独占、独り占めである!!

一泊二日、で近くには温水プールも完備。そこで私の泳ぎの練習もすると言うテンプレを詰め込んだ旅行。

ああ、楽しみ……

水着や着替えタオル色々入れて、歯磨きとか必要な物全部入れるとバッグがパンパンになる。それを持ってみると結構重かった。バッグの中には私の期待とかドキドキまで入っているんじゃないかと思う位だ。

ふと、視線が私の背中に注がれていることに気づく。振り向くと……私が居た。

ショートヘアーでほんのりと私より胸がある。
そして、鏡を見ているようなのだ。さらに、何だか気まずい。
「……な、なに？」
「十六夜と旅行？」
「あ、そう……だけど……」
「二人きり？」
「う、うん……」

何で、そんなこと聞くんだろう。同じ私なのにイマイチ考えが分からないんのよね。

「それ……私も行っていい？」
「え？　それは、遠慮してほしい……」
「邪魔はしないわ。遠くで見てるから……ね？」
「……まぁ、それなら」
「ありがと……このことは十六夜にも内緒でいいから……」

彼女はそのまま歩いて行った。何を考えているんだろう……本当に分からない。自

分のはずなのに……分からない。

未来の自分の事を考えていると再び視線を背中に感じる。振り返るとコハクが居た。目を細めて嫉妬の視線を送る。

「旅行……ずるい……です」

「いつか、連れてってくれるわよ」

「まぁ、そうですけど……はぁ、いいなぁ。絶対連れてってもらいます……」

彼女はそのまま私の元を通り過ぎた。

十六夜の事だからコハクもアオイもクロコも萌黄も計画してると思うけどね。彼女もそれは分かっていると思ったのでわざわざ言わなかった。

「そろそろ、ご飯らしいですよ」

彼女が再び戻り、私に夕飯の連絡を言った。私はそこから立ち上がり、リビングに向かう。以前より騒がしくなったリビングに。

旅行を考えると幸せで頬が吊り上がるので、それを抑えるが大変だった。

◆◆

私は過去の私と十六夜の旅行を見学することにした。理由は……ただ、見たかったから。振り返りたかった、過去に浸りたかったからだと思う。

何も考えず、ただ幸せだったあの時を見たいだけ。私が入ると不要な事態を招いたり、ごちゃごちゃすると感じたから遠くで見ると言うのが一番いいと思う。

私も十六夜とは二人きりで旅行に行ったことがある。本当に楽しかったし、嬉しかった。ちゃんと私の幸せを考えてくれて、二人の時間も大事にしてくれて、手を引いてくれて本当に幸せな時間。

これがずっと続くと思っていた。でも、それは無かった。幸せは途中で消えた。

「じゃ、じゃあ、水着に着替えてくるから」

「は、はい」

二人が旅館に荷物を置いた後、近くにある温水プールでひと泳ぎするようで脱衣所で別れる。ああ、この初々しい感じも懐かしい。

私もサングラスをかけて水着に着替えて、ちょっと遠くから二人を見守る。
「じゃあ、泳ぎの練習しましょうか……」
「そ、そうね」
私もやったなぁ、二人で練習。泳ぐときに手を引いてくれたのよね、十六夜。
「あ、その手を、持ってバタ足の練習をすると良いって動画サイトで言ってました……」
「あ、そそう、じゃあ、その手を握って貰っていい……？」
いや、初々しいわね。本当に。彼は過去の私の水着姿に見惚れつつ少し恥ずかしさもあるようで目線を合わせたり逸らしたり。
逆に彼女は彼が意識しているが嬉しいのと、実はパット入れてるのがバレたんじゃないかと思いながら二重でドキドキしている。私がそうだったから彼女の今の微妙な心境は手を取るように分かる。

「も、勿論です」
いや、本当に照れ屋ね。十六夜。まぁ、彼女がしている水着は結構良い感じのだし。赤めの奴でコハク程じゃないけど谷間も無くはない。足と尻は良い感じに引き締まってるし。いつもと違うツインテールにしてない長髪。
「じゃあ、に、握るわよっ……」

「ど、どうぞ」
二人で旅行なんて初めてだし緊張するのは良く分かる。手を握り合って互いに赤面している二人を見るとちょっと羨ましくなり、同時に過去を思い出して楽しくもなった。

十六夜の手、ゴツゴツしてる……とか、思ってるでしょうね。

「バタ足やってみて貰っていいですか……」
「う、うん」

温水プールだから生ぬるい温度。彼女は手を握ったままバタバタと足を動かす。水飛沫が沢山彼女から起こる。
彼女が進むのに合わせて彼は後ろ歩きで進んでいく。
「ど、どう？」
「上手です！　コツを掴んでるんじゃ……」
「いや、もうちょっと！　ま、まだ掴んでない！　水怖いから！」

彼女はずっとバタ足。それを何度も繰り返しているうちにコツを掴んでいるんだけど手を握っていたいから嘘をついている。

暫く、練習するとここでビート版使おうとか言うのよね。私が泳げるように本気で頑張ってくれるのは嬉しいんだけど。それが欲しいんじゃないのよ。

ああ、ここで私がかなり恥ずかしいことを言ったのを思い出した。本当に恥ずかしい。

「じゃあ、ビート版借りてきます！　それで出来ればもう、泳ぎなんて」

「十六夜の手が良い……」

「ッ！」

「ダメ、かなっ？」

見てると本当に恥ずかしい。実はこれ、限界まで上目遣いして前かがみして、若干の谷間をアピールして声音を可愛い子にしてる。

「もうッ、いくらでもやりましょう！」

「じゃあ、お願いしてもいいっ？」

「どんだけ、可愛いんですか！　良いに決まってます！」

「ありがとうっ」

女々しい、メスね、ここまでメスメスしてたかしら？　コハクのこととやかく言えないくらいのぶりっ子ね……

二人は再び手を握る。そのまま泳ぎの練習を再開。

ずっと練習していると彼女は美人と言う事もあり、男女問わずに周りから視線を向けられる。

「火蓮先輩が美人だから視線が凄いですね……」

「美人かァ……こほん、まぁ、そうなのかしら？」

美人と言われたことにちょっと嬉しくなって表情が緩むが直ぐに年上の威厳を保ちたいと思って気を入れなおす。

彼女は彼が少し、面白くない顔をしているのに気付く。

「どう、したの？　えっと、何か嫌な事でもあった？」

「いや、なんでもないです……」

「……もしかして、私が他の人に見られるのが……嫌とか？」

「……はい」

「……ば、馬鹿！　それしきのことで、不機嫌に何かなるんじゃないわよ！　もう……

（えへへ、そっかぁ……そうなのね……独占欲が前より強くなってるじゃあない！）」

内と外で思ってることが違うというは凄い分かる。あの時の私も超絶嬉しかったと

覚えているからだ。

その流れでかなりの爆弾発言をしたのも覚えている。

「すいません……なんか、こういうのを言うのってキモイって思うんですけど……なんか、その……」

十六夜が今までないくらい不機嫌な感情をあらわにする。それにちょっと嬉しくなって調子に乗った。

「バカ……もう、しょうがないわね。そんなことで不機嫌になるなんて」

「すいません……」

「……今日の夜は、全部、見せてあげるから、機嫌直してよ……」

「――ッ???!!」

十六夜は鈍感じゃないし、鋭い。それに期待もする。だから、この旅行でそう言ったことがあるんじゃないかと絶対に思っていた。

それを彼女は分かっている。だから、その彼の期待と意識をより一層強めたのだ。

ママ感を出して大人の雰囲気を醸し出す。自分良い女だなと思いながら彼女は完全

に調子に乗っている。あの異世界のベンチを同じなのだ。
彼女は自分がどんな発言したか理解しているのだろうか。あとで思い出してとんでもなく悶えるのを覚悟しているのだろうか。
我ながら本当に馬鹿だなと思う。この旅行で今まで以上の特別な関係なろうと思っているから言っても良いとか思ったんでしょうけど……あなたはご飯を食べて、温泉で入浴してブレスケアと歯磨きをして勝負下着を付けたまでは良いけど、泳ぎ疲れて爆睡すんのよ……翌朝、赤面で起床。
十六夜は全然気にしてない感じで寧ろ可愛いと真面目に言うけど、どこか笑っていて……まるで年下を見るような慈愛の目を向けられるのがさらに恥ずかしくて。それからしばらくは年下扱いな感じなのよ……

まぁ、それを含めて良い思い出なんだけどね……私は馬鹿な私を見ながら思わず笑ってしまった。

パラレル時空ラブコメ編

黄ノ章1

ご注意点、これは本編とは関係ないイフルートとなります。十六夜君の記憶が戻った時が小学時代だったらと言う設定で構成されています

ある日、俺は目覚めてしまった。本当の自分に……別に厨二的な事を言っているわけではない。

前世の記憶を取り戻したのだ……

俺の手は凄く小さくて、足も小さい。大体……小学生くらいだろうか。

フツメンで転生していた。顔面ガチャに今世も負けてしまった俺である。まぁ、それでもリライフと言うわけなんだからそれなりにモブなりにそこそこの人生を過ごそう

と思っていたんだ。
だって、俺は普通の世界に転生したと思っていたからだ。
だが……それは違った。この世界は普通じゃなかった。
俺が普通に小学校生活を送っているとある少女が目に入った。そう、それは……黄金の眼と髪。可愛らしい顔立ちでショートヘアー。
忘れるわけがない少女。魔装少女の一人である……
「黒田ー、誰見てんの？」
「あ、あの子の名前って？」
「黄川萌黄……じゃなかった？　俺達とは違うクラスで女子にしては大分背が大きいやつだな」
隣の席の増岡君が俺の疑問に答えてくれる。そうか、この世界は魔装少女の世界だったのか。まぁ、俺みたいなモブが関わっていいような人でもない……
とはならないだろうがぁぁぁぁっぁ!!!

魔装少女にはバッドエンドがある。だけど、そもそもがこの時期って黄川萌黄に取って一番つらい時期だ。

これを見過ごしてもいいのだろうか……いや、よくないだろう……。黄川萌黄の虐待と男子からのからかいをどうにかしたい。知ってて見過ごすだけは、俺には出来んのだ……

取りあえず、父親をどうにかしないとな。近所の評判はいいし、家でしか本性を現さない。なら、家の中に監視カメラを……

いや、カマをかけるか……俺は……決めたぞ

◆◆

痛い……昨日殴られた腕と足、腹に痣が出来てる。父は物心ついたころからずっと僕と母を殴り、蹴り罵詈雑言を浴びせる。

それを周りに言えばどうなるかと脅されている。また、今日も……

怖い、怖い、怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い腕が足が唇が極寒に薄着でいるのではないかと錯覚するほどに震える。もう、限界だ。僕もお母さんも……

誰にも頼れない。どうすれば……

どうにもできないのにどうにかしたい。どうにもできないと分かっているのに救いを求めてしまう。

とぼとぼと途方に暮れるようにゆっくりと家に帰って行く。

「あの……」

後ろから知らない男の人の声がする。振り向くとそこにはフツメンでランドセルを背負った男子が居た。同じ学校なのかな？

「なに？」

「えっと……ちょっと家に遊びに行っていいですか？」

「……はい？」

何を言ってるんだこいつは……初対面だし、いきなりそんなこと言うとか頭おかしい……もしかして、あれか？　からかいたい男子みたいな感じか？

毎日のように身長がどうこう言いやがって、何が巨人だ。何がデか女だ。傷つかないとでも思っているんだろうか。

同じクラスの女子が庇ってくれるからまだいいけど……こいつも僕の噂を聞いて馬鹿にでもしに来たのか。

本当にくだらない

ウンザリする程されてるけど、こいつも同類なんだろう。

「えっと、その、遊びに」

「無理」

僕はそのまま踵を返して歩き出す。そもそも父に誰も家には呼ぶなと言われている。家の中は傷とか穴とか開いているから見られたくないんだろう。

「あの」

「無理」

「……」

「……」

しつこいな。無言で付いてくるし……変態か？　まぁ、いい。関わり合いにならない

ように無視して家に帰ろう……

帰っても……どうせ……

フツメン男はいつまでも僕の後を付いてきた……いや、ちょっと待て、その男の後ろにも誰かいる？

手鏡でこっそり確認すると鏡にはフードを被った大人が写っていた。女性、なのか？

何なんだろう。この状況は……何か大きな犯罪でも起こるだろうか。

フツメン男は何も言わずついて来て、謎のフードもずっと付いてくる。家に帰ってもどうせ地獄が待って居る。もし、このまま何か大きな犯罪に巻き込まれても、巻き込まれなくてもどうせ……なら、このまま何もしないで……

いや、ダメだ。お母さんを一人には、出来ない……帰らないと、怖くても帰らないと……その場から早足にその場を後にする。僕は足が速いけど、足にも痣やけががあるからびっこを引くように帰る。

「だ、大丈夫ですか！」

「五月蠅い!!」

心配する彼の手を振り払って家に帰る。もう、思考が訳が分からなくなってる。でも……帰らないと、お母さんの元に

曲がり角に差し掛かってそこを曲がると誰かにぶつかった。思わず尻もちをついて見上げる。

「ッ……お、とう、さん……」

「萌黄……ごめんなさいは？」

そいつは薄ら笑いでただ見下ろした。娘なんて思っていない。怖くて、声が、上手く出ない……

「ご、ごめ、ごめんな、ささ、さい」

震えがどんどん大きくなる。恐怖一色で頭の中が埋まる。誰か、誰か……

助けて

「おい、その子から離れろよッ」

　誰かが前に立った。僕を守るように盾のように。その人は子供で自分と同じように背丈だった。

「??　君は、萌黄の友達かな?」

「さぁな、肩書なんてどうでもいい」

「なにか勘違いしてるのかな?　この子は私の娘なんだよ」

「じゃあ、なんでこの子はこんなに震えてんだ。って聞くのは野暮なんだろうな」

「何か勘違いしているんじゃないかな?　私は……」

「ああ、言わないていい。全部分かっているんだ。アンタの悪行もようやく年貢の納め時って訳だよ」

　アイツが顔を一瞬曇らせる。自分のしたことがバレたのではないかと言う疑問。僕がばらしたのかと視線を向けてくる。

「もしかして、萌黄から何かを聞いたのかな?　多分、それはこの子が」

　嘘をついていると言う前に前に立っている彼が懐からＵＳＢメモリーを取り出した。

「ここには、アンタの家にこっそり仕掛けていた。隠しカメラのデータが入っている」
「ッ!?」
「えっ？」
　アイツは驚き、僕も思わず声を上げてしまう。つまりこの子は知ってるんだ。どんな目に僕とお母さんがあっているのか……
「見たぜ、腹に腕に足……笑いながら花瓶まで投げて、火のついたままの煙草を頭に当てて、この子の母親の頭に傷をつけて、怪我だと言えと脅したのも知ってるんだよ」
　知り過ぎている……本当に知ってるんだ、ハッタリだと思っていた、僕とアイツの眼が変わる。
　僕は希望にアイツは絶望に。

「このまま、これは警察に突き出してやるよ。残念だったな……いい大学出て、社内でも良い評価を貰って昇進が決まりかけてたのに……いやー、もう、ホンマにお疲れさん（笑）」
　煽り散らかして彼は行った。するとあいつが怒りの形相で彼の首を締め上げる。子供の彼には抵抗なんてできずにされるがままになってしまう。
「ッ……あが、ああ」

「殺すッ」

壁に押し付けられて彼が首を絞められて、このままだと死んでしまう。ああ、怖い、怖いけど……動け、足も腕も、全部動けッ

僕が意を決して立ち上がろうとした瞬間

「うちの息子に何やってんだあああああ!!!!」

「グべぁああ」

急にフードを被った女の人がアイツにドロップキックをかます。三メートルくらい吹き飛んで口から痛みを声をこぼす

「現行犯逮捕だ、クソ野郎!」

中指を立てて女性はアイツを言った。そのまんま懐から水鉄砲を出して顔に噴射

「あがあがああ!!!」

「死ね!!　クソ野郎が!!」

そのまま股間を思いっきり蹴飛ばしてアイツは地面に沈む。彼女はそのまま彼の元に寄り添った。

「大丈夫っ!?　十六夜!?　大丈夫なの!?」
「勿論……最高だよ……カメラで撮ってくれた?」
「勿論……もう警察にも連絡したわよ」

この人たちは親子なんだろう……何が何だか分からないけど……

この日、僕とお母さんの運命の転換点となった事を自覚するまでに大分時間がかかった。

黄ノ章２

閃光のように私生活が変わった。あの男は逮捕されてお母さんと僕は自由となったのだ。

良く分からないのだが彼のお母さんが全部手回しとか色々してくれた。自宅捜査なども行われて、僕もお母さんもすべてを告発。

いきなりすべて……変わった。

「本当にありがとうございました……」

「いえいえ、私達が勝手にやった事ですから。ね？　十六夜？」

「あ、うん」

お母さんと彼と彼のお母さんが話している。病院で僕とお母さんは治療を受けたのだ。それにわざわざ関係ない二人が来ていると言う現状。その関係ない二人に救われた。

一つ疑問が浮かぶ

どこで僕たちの事を知ったんだ？

この目の前にいる人たちはお人好しなのだろう。それには感謝している。だが、それだけでは説明がつかない事が多い。

あの時、彼が言ったのは明らかに細部まで知っているような言い回しであり事実であった。だけど家には隠しカメラなんて無かったし、あの男も馬鹿じゃないから情報が出回るなんて……あり得ない……

「あの、どこで私達の事を?」

お母さんが恐る恐ると言った感じで彼の母に聞いた。大人な彼女が全てを企てたのではないかと言う考えと言うのは理解できる。表沙汰には彼がいきなりアイツに酷い目に遭い、その流れで家の事が明るみ……細部が適当に誤魔化されているのだ。彼は何も言っていない、いきなり襲われたと泣き演技しながら言った。

僕も隣で彼と話を聞いていた。アイツは彼に挑発されたから襲ったと言っていると警察の人が彼に言うと

『あれれーおかしいぞー、俺は何も言っていないけどいきなり襲われたのにー』

『そうなのかい?』

『うん、でも僕子供だから良く分かんなイヤー』

僕もそれに一応のっかっておいた。でも、お母さんには全部言った。だから、お母さんはそれが気になって知りたいのだ。そして、全てを知ったうえでお礼を言いたいのだ。

「ああー、それなんですけど……うちの子がいきなり計画を建てたんです」

彼のお母さんはこっそりここだけのお話にしてと小さめの声で話した。

「ええっ？」

お母さんは驚く、僕も声に出さないけれども驚きを隠せない。僕とお母さんそして、彼のお母さんも彼に視線を向ける。

「君は……どうやって萌黄と私の事を知ったの？」

「……ボクコドモダカラヨクワカラナイ」

「こうやって、うちの子ずっと話してくれないんです。だから、まぁ、秘密でお願いします」

「はい、分かりました。……十六夜君、ありがとうね」

「良く分からないけど、どういたしまして」

子供のように彼は話す。確かに外見は子供で僕と同じ位。でも、あの時も彼はまるで、大人の様だった……

「あの、ありがとう、ございました」
「いえ、気にしないで大丈夫です」

僕もお礼を言った。

「もしかしたら、うちの子超能力者なのかも……」

真面目な顔をして彼のお母さんは息子を見る。いや、そんなまさかと思ったけどそうなのではないかと思ってしまう自分が居る。

「それじゃあ……私達はそろそろ」
「そうですか……本当にありがとうございます」
「いえいえ」

二人はもう帰ってしまうようだ。彼のお母さんはそろそろと帰ることを促す。でも、彼は未だに帰らないようで僕のお母さんを見た。
「あの……貴方……体が弱いんですよね？」

「っ！　本当に超能力者なの……!?」
「それは置いておいて……しばらく入院した方がいいと言われたのでは？」
「……それは」
「でも、子供が居るから断ったのでは？」
「……」
「これは提案なんですけど……彼女、家に預けませんか？」
「「ッ!!??!!」」

　真っすぐ目を見てお母さんに彼は告げた。急展開過ぎていきなり過ぎて、彼の思考に僕はたどり着けない、何をどうしたらいきなりそんなことを言えるのか。

「一旦、です。一旦預けてその間、お母様には英気を養うと言うか体調を万全にしてもらうと言う考えの元、萌黄さんを家で預かりたいと言っています」
「でも……」
「まぁ、いきなりと言われてもそう簡単に決められないとは思いますが……体調崩して最悪な事になってしまうと何というか目覚めが悪いので。うちとしては萌黄さんを預かりたいなと……ね？　母さん？」

「え？　あ、うん……そうね……」

いや、自分のお母さんも置き去りにしてるよ？　本当にいいの？

「……正直な事を申しますと、私はかなり体調が芳しくなくて、医者からは直ぐにでも入院した方が良いと言われています。ですから、そう言っていただけると萌黄をお願いしたいと思ってはいます。ですが、ここまでしてもらってさらに、そんなこと……」
「大丈夫です」
「私としても大丈夫ですよ。困った時はお互い様ですし」
「ありがとうございます……萌黄……大丈夫？」

お母さんが僕に視線を向ける。お母さんと僕にとって祖父と祖母は余り仲が良くない。だから、頼りにくいのだ。
お母さんの体調が悪いことも知っていた。だけど、アイツが病院には行くなと自分のさせた怪我がバレるから行かせなかった。
そして、僕が子供だから面倒見ないといけない、それによってお母さんに負担をかけてしまう事も知っている。

少し、寂しいけどその選択でお母さんが良くなるなら……

「うん……」

「お願いしてもいいでしょうか？」

「勿論です」

「私も大丈夫です」

彼が親指を立ててグッとマーク、彼の母親も親指を立ててグッとマーク。この二人が親子なのだと分かった。

そして、二人して底抜けのお人好しなのもこれ以上ない程に分かった。

◆◆

黄川萌黄の母である、黄川黄奈は元から体が弱くて、頼れる人も居なくてずっと耐え来てた人だ。娘を守り育てる為にずっと鞭打って頑張ってきた人だ。

本当に頼れる人が居ないから、彼女は苦労だらけの人生だ。彼女の両親と黄川黄奈は仲が悪い。彼女が嫁入り反対を押し切って結婚をしたからだ。

今、この状況下で俺のするべき選択とは何だろうか。それはただ一つ。頼れる人が居ないなら我が家を頼ればいいじゃない。黄川黄奈の治療をさせてその間は黄川萌黄は俺が面倒みればいいじゃない。

と言う選択に尽きる。

そうすれば本来なら死んでしまう黄川黄奈は死なないんじゃないかと……思う。きっとそうであると思う……

甘えん坊の黄川萌黄からしたら寂しい思いをすることもあるだろうけど、そこは見舞いに言ったり、我が家で寂しくない様にはっちゃけていろいろ盛り上げれば多少は軽減するだろう。

死んでしまうと知っているのにそれを見逃すのは何というか……俺には出来ない。

まぁ、やれるだけやろう。やらないで後で後悔はしたくないからな……

黄ノ章3

僕は着替えやら日用品を持って、彼の家に向かった。帰の家は二階建てのちょっと広い一般の家。

「好きなように使ってね」

「あ、はい……ありがとう、ございます……」

「萌黄ちゃん、しっかりしてるわねー」

愛さんはキッチンに向かうと鼻歌交じりに料理をやり始めた。

「あっ、萌黄ちゃんはテレビでも見てて」

「は、はい……」

優しそうな人だなと思った。言われた通りにテレビを見ようとする。テレビの前のソファには彼が座っており、どうぞどうぞと僕を座るように促す。

ぺこりとお辞儀をしてソファに座った。テレビでは歌のお兄さんが歌を歌ったり

踊ったりしている。その後に芋虫のアニメ。

チラリと隣の彼の顔を見ると彼は特に表情を変えずに見ている。その表情がどうにも子供には見えなかった。先ほどはあんなにも子供な感じで話していたのに急に大人のように見える。

その表情にちょっとだけドキッとしたのは秘密だ。

「あの、怪我大丈夫ですか?」

「あ、う、うん……」

「それはなによりです。えっと、見たいテレビとかありますか?」

「だ、いじょうぶ……」

彼は滅茶苦茶僕を気遣ってくれた。優しそうに話しかけて、僕が色々悩んでいる事すらも分かっているかのように瞳は優しに溢れていた。

「……ゲームとかやります?」

「だ、いじょうぶ……」

「そうですか……」

「う、うん……」

気まずい……あちらが気遣ってくれているのは分かるんだけど、どうすればいいのだろうか。甘えるべきなのだろうか、でもそれはますます迷惑だし、もっとお礼とか言った方が良いのだろうか。でも、あんまり言いすぎても逆にあちらに気遣いをさせてしまうのではないだろうか。

前方多難、どうしても気づかいさせてしまう気がする。

「ああー、じゃあ……俺……腕立てしていいですか？」

「ええ!?　急!?　あ、うん……いいんだけどさ……」

先程とは全く違う話の内容で思わず突っ込んでしまったが彼は気にせず腕立てを始める。何故、腕立て……？

「あらあら、十六夜ったら可愛い女の子の前だからってカッコつけちゃって……」

キッチンからくすくすと笑う愛さんの声。

僕にしろ、彼にしろ、本人いるのにまぁまぁの音量で言うのはワザとなのだろうか。何というか、親子そろって面白い人達……

「ああ、クソ、チート体に転生したかった……腕立て出来ない……」

「だ、大丈夫？」

「大丈夫ですっ……」

彼は細い腕をプルプルさせながら腕立てを続ける。不格好だけど、なんだか応援をしたくなる不思議な姿。

が、頑張れ……

「はぁはぁ、一旦休憩……」

二十回ほどだろうか、彼は額に汗をにじませて休憩に入る。良く分からないけど、頑張る姿をもっと見たいと思った、あと何回やるんだろう……僕としては三十回くらい見たいかも……

「あと、三千……」

いや、多すぎ!!

桁が違う!!　いや、なんでそんなに頑張るの！　僕は男子のは平均腕立ての数とか知らないけど明らかに君は多いよ!!

腕とれたちゃうよ!!

そもそも、なんでそんなに……

……僕にカッコいい所を見せたいから……的な？　ええ!?　あ、うん、その可能性も無きにしも非ず。僕の事を助けてくれたし、もしかして、僕のことが……す、好きだから？

そう考えると意外と全ての物事が繋がるかもしれない。彼は僕が好きだから、助けて格好いい所を見せようとしている……いや、でもそんな……僕みたいま芋女でデか女が好かれる訳なんて無い……

そう思うと急に心が冷えた。

「はーい、ご飯できたよー」

愛さんが食事を運んできた。それはお子様ランチだった。僕がお客都市来たから気を遣ったのだろうか。

彼と隣り合って座ってスプーンでパクパク口に運ぶ。食べたら感想を言った方が良いよね。

「美味しいです」

「あらー、ありがとう、十六夜は？」

「普通に上手い」

彼もパクパク食べている。その姿をちょっと可愛い……と思ってしまった。

あんまりチラチラ見るのも良くないからそこからはあんまり見ないようにしたが彼に自然と目線が向かってしまう。

フツメン……学校に彼よりイケメンなんて沢山いるし、彼より運動神経が良い人も沢山いる。でも、何かが違う。そう思ったのだ。

◆◆

夜は彼のお母さんが一緒に寝てくれた。彼は一人でベッドで寝ているらしい。凄いな、僕なら絶対に無理だ。

ずっとお母さんに甘えて一緒の布団で寝ていた。それ以外は考えられないし、出来るはずもない。

彼のお母さんは寂しくない様にと桃太郎を呼んでくれた。お母さんもよく読んでくれたけど……偶然だろうか。何か意図を感じる気がする。

頭の中に色々考えがあるけど、今日は、いろいろ、あり、すぎて……疲れが……すや

～

◆◆

次の日は愛さんが車で送ってくれた。怪我とか色々あるかららしい。それに今日は仕事が忙しいから帰りが遅くなるらしい。

愛さんが去り際にそう言って、そのまま車から降りる。その時に彼と一緒に車から出てくるところも誰にも見られないと言うのは無理であり、見られるといつも通り、いやそれ以上にからかわれることなど予想できた。

クラスが一緒の男子が僕たちに寄って来る……前に彼が僕に話しかける

「きっと、からかわれると思います……」

「そうだね……」

「そんな時に役立つ対処法を教えましょう！」

「え？」

彼はサムズアップしながら僕にここだけの耳より情報だぞと言わんばかりの表情で告げた。

「まず、相手にしないようにしましょう。怒ったりすると余計に面白がるのが小学男子です。そして、適当に流す。相手に全くしない。怒って追いかけたり、声を荒げたりそういう事をすると相手の思うつぼです」
「そうなんだ？」
「萌黄さんは可愛いから相手にしてほしいと思ってそう言った事をやるんでしょうから、しばらくは続くかもしれませんね……断ち切るか？　男子……でも、派手にやっても今後の学校生活があるからほどほどにしとかないとな……」

可愛い、か……そういう事真面目な顔して言わないで欲しいんだけどなぁ……思わず照れちゃってるこっちが独り歩きの馬鹿みたいじゃん……

まぁ、何とか顔には出さないようにはしてるけどさ……

「えっと、取りあえずありがとう、相手にしなければいいんだよね？」
「はい！　でも、どうしてもの時は言ってください。断ち切りますから」
「いや、何を!?」
真面目な顔して……とんでもないな。彼は僕を気遣っているから、歩くペースをだい

ぶ落としている。
　彼はそうしながらブツブツと何かを話している
「こうやってやってると、カップルとか言って馬鹿にされるか？　小学男子は……ウザイからな……やっぱり断ち切るか……」
　君も小学男子だよね？　変に大人っぽいなと感じる。そんなことを思っているといつも通り、からかい男子が達がやってくる。
「おいおい、巨人に彼氏がいるぞ！」
「やーいやーい、巨人族！」
「結婚式はいつですか？
　三人、からかい男子はいつも来る。だが、僕達は無視してその場を去る。相手にしないのが面白くないのか、一人の男子が彼の肩を掴んだ。
「おい、無視すんｎ」
「お、そうだな（適当）」
　相手が言い切る前に彼は言い返す。話なんて全く聞いていないのがまるわかり。目を細めて適当に会話を返す。
「話をきｋ」
「お、そうだな（適当）」

「てめ」
「お、そうだな（適当）」

最早、相手に一切の反撃の機会を許さずに彼はそのまま相手の言葉を只管に流す。流して流して流し尽くす。
その内、男子達が僕に何かを言ってくるが僕は無視をした。只管にそっぽを向いて、前で彼が耳を手で閉じたり開いたりしてるのが見えたからそれを真似して男子達の声を宇宙人の声のようにして流す。
多分一人だときつかったけど彼が居たから、自然とつらくなかった。

そして、男子達が消えて二人きりになった

「凄い……こうすれば良かったんだ」
「フッ、小学男子のことなら、この俺に任せてください……あ、クラスでは男子からの煽りは無視して女子と只管に話した方が良いですよ。委員長みたいな子がきっと庇ってくれますから」

「うん」

こんなに、してやったりと言う気分はいつぶりだろうか。今まで不快だったのに全然そんなことはない。寧ろ、清々しい。アイツが消えたと言う理由もあるけど、それだけじゃない。どんどん幸せになっている気がする。

まるで彼は幸せを運ぶ、天使なのではないかと僕は本気で思った

黄ノ章4

彼の家に居候してから大分たった。何というか、彼との生活は驚きが無い日が無かった。

牛乳を丸ごと一本飲む、それを朝昼晩、そしてお腹壊して顔を青くする。心配しても大丈夫と言ってランニングを始める。

行ったはいいが家から外に出ると数分でお腹が痛いと帰ってくる。

今までにこんな人は見たことがない。馬鹿みたいに一生懸命なのだ。

「そうなの……十六夜君は面白い子ね」

「うん……？　おもしろい、のかな？」

病室のベッドにお母さんは座って、僕は病室に置いてある椅子に座って生活の事を話す。お母さんは点滴を打って、服は入院着だ。でも、顔色は以前よりずっといい。

「牛乳をそんなに飲むなんて、しかもお腹を壊しても飲み続けるんでしょう？　とっても面白い子じゃない」

「うーん……そうなのかな？」

「そうよ、しかも、クラスの男子からも守ってくれて、面白くて優しいなんて、凄い子よ」
「まぁ、ある意味じゃ凄いけどさ……」

お母さんは僕の頭を撫でる。それが心地よくて自然と笑顔になる。
「感謝してもしきれない……わね……」

反対にお母さんは僕に申し訳なさそうな表情をしていた。その理由は何となくだけど分かった。アイツの事だと。
でも、それをどう言葉にしていいのかは分からない。

「そう言えば、十六夜君はどうしたの？」
「えっと、外で待ってるって言ってた」
「そう……ねぇ、萌黄、お母さんに飲み物を買ってきてくれない？」
「う、うん」
「それと、外に居る十六夜君を呼んできてくれないかな？」
「え？　あ、うん」

お母さんが僕に小銭を渡す。そのまま病室を出て外にいる彼に話しかける。
「あの、お母さんが話したいって言ってるんだけど、いい？」
「分かりました」

彼は病室に僕は自動販売機の場所に行くためにそれぞれ歩きそれ違った。

僕は病院内を少し歩いてお母さんが好きなオレンジジュースを買った。そのまま自動販売機から踵を返して病室に戻る。途中にお医者さんとすれ違う。看護師さんともすれ違う。
「ねぇ、あの子可愛いくない？」
「うん、可愛い」
可愛いのか？　僕は可愛いのか？　あまり意識はしたことはないけど……可愛いのだろうか？　巨人とか言われて、可愛いとかは無縁と思っていたけど……
どうなのだろう。

トボトボと歩いて病室に戻ると、お母さんと彼が話していた。

「そう、萌黄は良い子にしているのね」
「はい、滅茶苦茶良い子です」
「あの子は笑ってる？」
「ぼちぼち笑っています」
「それは良かったわ……」

　お母さんは僕が娘だからどのように過ごしているのか気になってしまうのだろう。娘が迷惑をかけてないか気にしてしまうのだろう。
　お母さんは話ながら少し悲し気に瞳を落としてポツリとつぶやいた。
「あの子にはずっと辛い目に遭わせてここまで来てしまった……でも、今のあの子は幸せそうにしてる……全部君のおかげ……ありがとう、十六夜君」
「全部俺のおかげではない、と思いますが……」
「そうね……愛さんのおかげでも」
「黄奈さんのおかげでもあるかと」
「ふふ、気を遣ってくれているのね。でも、私は何もできなかった……」
「貴方は逃げなかった。貴方は彼女を守り続けた。怖くても守り続けたのは親としてそれ以上の事は無いと思います……」

お母さんが卑下に走るのを彼は止めた。
「えっと、上手く言えないけど……彼女は貴方事が大好きで、貴方以上の親なんて考えられない。だから、まぁ、そんなに自分を責める事もないかと……」
「うんうん、私は私を責めないといけないの……あの子の学校の悩みとかも本当は私が相談に乗ったりしないといけないのに、今まで自分の辛さとかから逃げて話を聞いてあげられなかった。あの子は身長で悩んでいたのに……もっと私が」
「あの、それはこれからじゃダメなんですか？　これから何年も何十年も生きて向き合うって言うのじゃダメなんですか？」
「それは……」
「ようやく自由になったんだから、前を向いて楽しく行きましょう！」
彼はにかっと子供のように無邪気に笑った。少年よ大志を抱けのポージングをしてお母さんを指さす。
この時、僕が今まで会ったことがない、感じた事のないのが何か少しわかった。彼はわざと自分を憎まれ役にしたり、自分と言う存在を簡単に下げたり上げたりできる。自分の為じゃなくて誰かの為に。
今だって、お母さんを元気にするために面白おかしいポーズと笑顔で場を変えようと

してる。
「……っと子供の俺が言ってしまいました……すいません、上から目線で……」
「うんうん、謝らなくてもいいわ……何回お礼を言っていいのか分からなくなるけどありがとう、何だかおばさん元気出てきちゃった」
「それは良かったです」
　彼は再度笑う。きっと正直で嘘偽りなんて無いからお母さんは前を向けたのだと思った。
「萌黄が君を気に入ったわけが分かったわ」
「え？　俺をですか？」
「うん……もしかしたら君のことが好きなのかも」
「それは……どうなんですかね？」
　おおおおおおお、お母さん!?　何言ってんの!?　ドキッと心が跳ねてしまった、持っているオレンジジュースも思わず強く握ってしまう。
「身長で男子にからかわれる事に悩んでるあの子に色々してくれたって聞いたわ。きっと、そういう君の優しい所にほの字なのかも」
「うーん……そうは見えないですし……それに小学生くらいの女子って足が速い男子が

好きなのではないかと」
「……よく、そういう事知ってると言うか、自覚してると言うか……本当に君って小学生？」
……思わず頬を膨らませてしまった。別に何を期待していたわけでも無いけれど

「はい、小学生です」
「そうよね……」
「はい」
「……そう、よね？」
「はい」

彼は真顔で返事を返す。お母さんは首をかしげながら彼の顔を見てどうみても小学生だと思ったのだろう、一応納得したようだ。

「あ、そうだ。ねぇ？　十六夜君から見て萌黄はどんな感じなの？」
「顔良し、スタイル良し、声良し、仕草良し。と言った印象です」
「べた褒めなのね」

「いえ、客観的な事実です」
「そ、そう。うーん、確かに萌黄は顔も声も仕草もスタイルが良いわよね……私は萌黄は絶対モテると思ってたのになぁ」
「モテてはいると思いますよ。だけど小学生ですから、可愛いに構って貰いたくて仕方ないと言った感じです」
「へぇー、まぁ、可愛い萌黄だもの、モテてはいるのね」
「はい、きっとこの世界にランキングがあるなら五本の指は入るでしょう」
「親の私以上に褒めるのね……」
「さらにグッズ展開したらそれは売れるでしょうね。他アプリのコラボとかに出張したら荒稼ぎできるでしょうね」
「親の私でも言えないような褒め方をするのね……」

彼の言っていることがちょっと分からないが僕を褒めてはくれているらしい。その後も彼褒めは続いた。
「貴方は萌黄の背が高いのはどう思うの？」
「俺はとても良いチャームポイントだと思います……」
身長が、可愛いなんて言われたことなかった……いつも悪いようにしか言われたこと

なかったけど……

——可愛いんだ

何だか、胸がゴワゴワする……頭もボーっとするし……ソワソワしてしまう。

「そう……（チラリ）」

お母さんが僕の方を見た。あれ？　気付かれてる？　いつから気付かれたのか分からないけど確実にこっそり聞いているのは気付かれたようだ。

「萌黄の事、これからも宜しくね」

「俺が出来る範囲で良ければ」

「ふふ、子供らしくない返答ね。そこはお嫁さんにしてやるって子供なら意気込んでもいいんじゃない？」

「それは、子供でも言いませんよ……」

僕は病室に入った。熱い頬を彼に見せないよに下を向いて。オレンジジュースをお母さんに渡す。

「はい……これ」
「ありがとう」
「うん……」
　お母さんと目が合った。そろそろ、日が暮れ始めていた。だから、今日は帰らないといけない。
「あの、今日の所は……」
　彼が恐る恐ると言った感じで帰宅をすると伝える。暗くなると危ないから早めに帰りたいのだろう。

「そうね。萌黄、あまり迷惑かけないようにね」
「うん」
「萌黄さんは良い子だから心配ご無用です」
「ふふ、そっか……また来てね。萌黄」
「うん、また来るよ」
「十六夜君も良かったらまた来てね」
「はい、来ます」

そのまま、二人で病室を出て病棟内の階段を下りる。彼が少し前を歩き、僕は彼の少し後ろを歩く。

互いに特に会話はないけど。何もしていないけど、自然と心臓の鼓動が速くなる。

何か話したい、何でも良いからもっと彼の事が知りたい。自然とそう思って、気持ちが前に出て……それに気を取られて階段から足を踏み外した……

「あっ」

「え？」

殆ど、下の階段だったから怪我はしないだろう。でも、怖くて思わず目をつむってしまった。

次の瞬間、僕の胸が誰かが揉んだ。いや、誰かなんて分かっている。一人しかいない。彼はの上に僕は馬乗りになってしまい壁ドンならぬ床ドンの態勢。顔は近くてキスが出来そうな距離。

彼は僕の胸に掴んで、ちょっとだけ顔を赤くしていた。僕は見えないけどきっともう、ケチャップよりも真っ赤だなんてすぐに分かった。顔が今までの比じゃないくらいに熱いからだ。

「あ、ごごごごｇｇ、ごめんなさい!!!」

「ぼ、僕もごめん!!」
　彼は咄嗟に手を離した。僕も直ぐに彼から離れた。
「俺が、」
「いや、僕が足を踏み外したから！　ご、ごめん！」
「ああ、いやでも俺が支えてあげられなかったから！」

　互いに謝り合っているけど僕が悪いのは明らかだった。謝り続けたけど、でも、彼が少し照れてる表情を見て、ほんのちょっとだけ嬉しかったのは絶対に秘密だ。

―

真第一話

ご注意点、これは本編をリメイクした第一話になります。パラレルの方はもう少しお待ち下さると幸いです。あと、新作も出したので読んでみてください。

異世界転生。縮めて……そのまんま異世界転生。この星の不思議な不思議な物語の序章として使われるものである。

科学が発達した現代日本に暮らす日本人が剣と魔法のファンタジーな異世界などに新たな生を受けることを指すのだが、今ではその概念を知らない者はいないのではないかと思えるほどに有名な物である。

一昔前まではそんな概念がチラホラあるくらいであったが今は違う。

その数、１００、２００、３００、４００、５００……０を二つ飛ばして５００００、更に飛ばして５０００００。数えればもっとある事だろう。これほどの数があるの

だから世界中に異世界転生は散らばっている。
　現代日本に暮らす日本人が異世界に新たな生を受けることを指すのだが、その生を受ける対象も様々である。
　人に、剣に、空に、海に、ダンジョンに、スケルトン、悪役令嬢、魔王、勇者……数えればきりがない。

そして、今ここに新たな異世界転生をするものが現れようとしていた……
　とある子供が……トラックに引かれようしていた。それをどこにでも居そうなサラリーマンが発見する。そして……
　子供を庇ってトラック（異世界転生装置）に引かれて……サラリーマンは死んで……そこから彼の物語が始まる。
　現代日本で死んだ彼が転生するのは現代日本に酷似した化学が発達する世界。
　スマホがあり、テレビがあり、高校があり、車があり、義務教育があり、納税の義務があり、しっかりとした法律があるような世界。
　だが、あくまで酷似していると言うだけである。似て非なるものがある。
　彼の転生する世界とは……彼が前世で読んでいたライトノベルの世界である。
◆◆

とある、男が制服を着て家のドアを開ける。
彼の名前は黒田十六夜（くろだいざよい）。何処にでもいるような風貌をして、背丈もそんなに大きくなく前世の記憶があると言う事を除けばただの高校生である。
そう、彼こそがトラック（異世界転生装置）によってこの世界に転生した元サラリーマンである。

彼がこの世界の記憶を取り戻したのは中学三年生の時。高熱を出してぶっ倒れてその時に取り戻した。
彼は少し生活するとこの世界が元の住んでいた日本と似ているが違う世界だと言う事に気づく。その理由は元の日本には無い町が存在していたからだ。
『七色町』
元の世界には存在しないが彼はこの町の名前を何度も聞いたことがあった。何故なら彼が前世で読んでいたライトノベル『魔装少女～シークレットファイブ』の舞台として登場する町だからである。
彼は焦った。もしこの世界が本当にライトノベルの世界であるのならばもしかしたら世界が滅亡するかもしれない。
『魔装少女～シークレットファイブ～』には二つのストーリーが存在する。一つは純粋な王道ストーリーであり、少女たちが世界を救ってハッピーエンド。もう一つは少女

たちがエグイ目に遭って死んでしまう『ｉｆルート』。

この『ｉｆルート』で展開されるストーリーはとにかく酷い。先ずこのストーリーはｉｆとしてスピンオフ作品として発売されたものだった。

魔装少女達のあり得たかもしれない物語。キャッチコピーはこんな感じだ。彼もも気になり読んでみたのだが、胸糞が悪い話のてんこ盛りであったのだ。

少女たちが殺され、男に弄ばれ、自我が崩壊、自殺。その他もろもろ。

そんな話によって構築されていた。これには、ファンも激怒。作者や出版社に非難殺到。ネットは大炎上をして僅か『ｉｆストーリー』は三巻で打ち切り。

少女たちが酷い目に遭った後世界を守る者がいなくなり世界も滅亡という最悪以外の何物でもないものであるから当然と言えば当然だ。

本来のストーリーもｉｆストーリーも『魔族』と呼ばれる侵略者が現れる。バッドエンドのほうでは既に彼女達は死んでしまっているので守護できるものも居ずに世界滅亡。どちらの世界もほぼ全く同じ設定であるが、『魔族』が侵略を始まるまでのストーリーだけが違う。

彼は悩んだ。もしかしたら純粋なストーリーの世界線という希望もあったのだが、もし違う場合どうなるのだろう。

そう考え始めたら、動かないわけには行かない。ただの凡人に何が出来るのかという不安と自身の身に何か起こるかもしれないという恐怖や不安でメンタルがズタボロであったが何かをしなければと言う使命感かそれとも違う何かか……彼は動いた。

彼にとって幸いだったのが、主人公と学年が一緒と言う事だろうか。自身が持っている知識と年齢を比較して割りだすことが出来た。多少は動きやすい気もするなと一筋の希望にすがりながら彼は物語の舞台である『七色町』に存在して魔装少女達が通う高校である『皆ノ色高校』に通うと言う決断をしたのであった。

■

桜が綺麗に舞っている。多数の花弁が俺の新品の制服の方に乗った。特に意味はないがそれを叩き落とす。

入学式は春の訪れを感じて新たなるスタートきれる素晴らしい物であると言うが俺からすれば絶望のスタートに感じた。この世界が最悪のストーリーであった場合はどんな目に遭うのか今から不安で仕方ない。

周りには明るい顔の高校生が多いが俺の顔は見なくても分かる。暗い奴だ。

俺は一息を入れて今後について考える。

ストーリーもｉｆストーリーも始まるのは、彼女達が魔装少女になる前であり力も何も持っていないただの女子高生の時。入学してから始まり本来の『ストーリー』なら大したイベントもなく『魔装少女』へと至る。だが、『ｉｆストーリー』の場合は違う。入学式から、立て続けに最悪の事態が起き全員が死亡する。そのまま、世界滅亡。

もしｉｆストーリーの場合、最悪の部分を俺は回避すればいい。本来の世界とほぼ同じ世界のため、そうすれば元の『ストーリー』の世界になりハッピーエンド。『魔族』が攻めてくる時に至るまでのイベントだけが二つのストーリーの相違点であるであるのだからと考えている。

どうか、どうか、最悪の方ではありませんように!!!

祈りながら俺は歩いて行く。俺と同じ赤を基調とした制服を着ている生徒達をすれ違う。そんな生徒達の横をすり抜けて下駄箱に靴を入れる。上履きに履き替えて自身のクラスに向かう。

俺の所属クラスは『１年Ａクラス』である。ある程度歩いて行くと教室に到着する。何だか、緊張をしてきたが意を決してドアを開ける。

教室のドアを開けると、中には既に何人もの生徒が楽しそうに話していた。教室の席の数と、今教室内の人数を比べると、俺はどうやらかなり遅めの到着らしい。しかし、そ

んなことはどうでもいい。俺は教室内を観察するうちに、人だかりの中にとある少女を見つける。

銀色の美しい腰まで伸びた髪、宝石よりきれいじゃないかと思う目。顔面偏差値が他とは比べるまでも無い美女。巨乳で艶のある声。

確か……Fカップ……だったよな。おっと、そんなことはどうでもいい。彼女こそが世界の希望であり我らが主人公。銀堂コハク(ぎんどうこはく)である。

既に彼女の周りには沢山の人がいて、入学初日にもかかわらず親しみが凄い感じられる。いきなりのカーストトップであることが分かる。女子だけでなく男子達からも既にあがめられる存在になっている。

「可愛い」

「女神だ」

「このクラスになれて、俺幸せだ」

俺は自身の席に着く。周りの男子たちが目をハートにしていた。気持ちは凄い分かる、確かにかわいい。それでいて上品。男子の憧れを、ぶち込んだ完璧な女性とも言え

るだろう。
　俺が座ると、席の前に居た男子生徒が俺に話しかけてくる。
「なぁ」
「どうした？」
　俺は返事をしながら、男子生徒の顔を見る。あちらは俺を誰かは知らないだろうが俺は彼を知っている。黒髪黒目のフツメン。
「特に用はないけど、これから席も近いわけだし挨拶しておこうと思ってな。
　佐々本太郎よろしくな」
「俺は黒田十六夜。よろしくな」
　普通の男子高校生と言った感じの青年。彼は佐々本太郎（ささもとたろう）というキャラクターだ。
　別名エロ本博士。エロ本を常に持ち歩き、所有数は四桁に届くとも言われる。普通に考えれば引くが意外と人気投票でも上位であるのだ。
「俺たちこのクラスで、幸せだよな？」
「いきなりだな。否定はしないけど……」
　佐々本はコハクを見ながら鼻を下を伸ばしていた。俺もつられて再び、銀堂コハクを見るが少し頬が熱くなる。確かにかわいい。何度見てもかわいい。可愛さがゲシュタルト崩壊を起こすくらいに可愛い。

「あの子可愛いよな～。彼氏とか居るかな？」
「どうだろうな。ただ彼女が彼氏を作るとしたら、とんでもないイケメンじゃないとな」
「俺やお前じゃ厳しいな」
――こいつ、ぶっ飛ばしていいだろうか？
物語キャラだろうが関係ない。ほぼ初対面で失礼な事を言う彼をぶっ飛ばしたい。
確かに俺はイケメンではないがここまでドストレートに言われるとメンタルにダメージが来る。
「お、そうだな」
何てことない返事をして机の下で左手で右手の疼きを抑える。俺は器がそこまで大きくない。器から怒りの水が零れそうだ。だが、目を細めて笑みを作り耐える。俺はコイツに怒りに来たのではないからだ。
「あーあ。何で俺達はフツメンなんだろうな」
「さぁな」
『達』は余計だな。そう言えば原作でもかなり馴れ馴れしく、思ったことを言うタイプだったな。
そんな事を考えていると教室の前のドアが開き教師が入ってきた。筋肉質の少し強面の教師。

六道哲郎。見た目通りただの教師ではない。彼の兄弟がこの町にある『血列団』と言うとんでもなく大きなヤクザの頭領であるのだ。声が渋い。

「お前たち席に着け」

中々強面の六道哲郎が言うと、皆ビビりながら素早く席に戻る。それを確認すると彼は話の続きを始める。

「今日から、お前たちの担任となる六道哲郎だ。よろしく頼む。早速だが、今から今日の入学式の説明を行う。しっかり聞いておくように」

その後、淡々と入学式についての説明を受け俺達Ａクラスは、入学式が行われる体育館へと向って行く。この学校は各学年ＣからＡクラスまでの３つで構成されている。全校生徒約３００人ほどの高校だ。

物語では５人の魔装少女がおり、現段階で魔装少女になる可能性を秘めているのはこの高校に三人。残りの二人は、現在はいない。

現在高校に居る魔装少女は三人。

一年生である銀堂コハク。二年生である火原花蓮。同じく二年生である黄川萌黄

残りの二人についてはｉｆストーリーが発売しなかった。炎上などの問題などで販売できなかったのか、そもそも無かったのかは分からないが……。

取りあえず注意を払うべきは、この三人。特に一番初めに酷くエグい目に合ってしまう銀堂コハク。彼女が酷い目に合わなければ、普通の原作と言う事でハッピーエンド。そのまま俺は傍観に徹することが出来る。

しかし、違うならばどうなるのか思い出したくもない……まぁ、今考えても仕方ない。取りあえず今は入学式に集中しよう。

黄ノ章　終

人を好きになる。それは誰でも体験することだ。恋をして一緒の時を過ごすと心が躍る。充実感に満たされて幸福に包まれる。

だが、人間とは欲張りな物でそれでは満足が出来ないから不思議だ。彼と出会って僅かな時を過ごして、そんな僅かな時間……本当に僅かなのだ。

それなのに……こんなにも想ってる。好き、になってしまったのだ。

特別な関係になりたいと思ってしまったのだ。それは日に日に強くなる。好きと言いあいたい。

彼は僕の事をどう思っているのだろうか……悪くはないと思っているはずだ。

自分と言う存在を見た時に顔は良い方だと分かる。身長は彼は長所と言った。だとするなら可能性はゼロではない。寧ろ多いにあると思っている。

と言うか、ハッキリと言わせてほしい。僕の中で一つの説がある。

――それは、彼は僕の事が好きなんかじゃないか説。

自惚れや自意識過剰とかではない。……と思う。多分だけど……

この考えに至ったのは彼の行動が遠回しにそうだと言っているとしか思えないから

だ。

お母さんに僕の事を話すときに彼は凄い、これでもかと褒める。テレビの商品押し売りなのではと思う位に褒める。

『もう、萌黄さんは良い子で！』

『あら、そうなの？』

『こんないい子は居ません』

因みに、近くに僕が居るのに褒めるのだ。もう、真後ろに居ると言うのにこれでもかと褒める。

これは、好きだから側にいる僕に遠回しにアピールしているのだろうか。期待してもいいのだろうか。お母さんが偶にチラチラこちらを見ているのは全て見透かしているんだろう。

学校では違うクラスなのに様子を伺い男子達が偶にからかうとあとでコッソリ励ましてくれる。表向きに庇うと色々問題があるからだ。

……これ、どう考えても僕に惚れてるよね？　男女の友情は成立しないと聞く。だとするなら友情ではない、恋と考えるのが普通である。彼も僕に好意を抱いていると考えるのが普通であるのだ。

僕としては告白されたい……するよりされたいのだ。ちょっと身勝手かなと思うがそれでもされたいのだ。

男の子ならそれくらいしてくれてもいいよね？

と考えてから数年がたった……

お母さんが退院して、彼の家から居候を卒業して、小学校を卒業して、中学に上がり、中学二年生の夏休みに突入した……

告白されない……あ、あれ？

何だかんだで毎年バレンタインでチョコあげてるんだけど……何なら、お返しも貰っているんだけど？

ど、どうして告白されないんだ？　あ、あれぇ？

焦らしプレイ？　そういうわけじゃないよね？　と言う考えを持ちながら生活を続

ける。中学に上がってから接点が少し減った気がするし……

僕はどうすればいいのだろうか？

「うおぉぉぉぉっぉおおおおおおおお!!」

そんな事を考えて彼の家の前で帰りを待っていると彼が日課のトレーニングから帰ってくる。足元に土煙が立って足がぐるぐると回転してドドドドドドと昔の漫画のように走ってくる。

そして、僕の前で止まる。肩で息をしている。

「はぁはぁはぁはぁ」
「はい、お水とタオル」
「あ、あり、がとうございます、はぁはぁはぁ」
「毎日……よく走るね……」
「ま、まぁ、今後のため……に……」

「無理して話さなくても……いいけど」

彼にペットボトルに入った水とタオルを渡して彼の顔を眺める。汗だくで頬が紅潮している。フラフラで息を吹いたら飛んでいきそうな感じもする。

彼は汗をふいて、水を飲む。ごくごくと自身の体に水分を流れ込ませる。使ったタオルを返してもらおうとしたら彼は返さなかった。

「洗って返します」

「いいよ、それくらい」

僕は彼からタオルと水をペットボトルに入った水を受け取る。学校だとクラス同じだけど僕は女子グループでつるんでるからあんまり話す機会ないし。もう少し話したいんだけどなぁ。そう思うが彼はそのまま家に帰ってしまう。

もう、一緒には暮らしていない。

お母さんとの暮らしも平和で楽しいけど君との時間も欲しいと言えればどんなに楽

だろうか。どんどん彼が離れていく気がする。そう思うと少し寂しくなって、だけど言えなくて余計悲しい。

僕も帰ろうかと思うと彼の携帯が鳴る。彼が誰かと通話して、ふと僕を見る。携帯の通話を切ると僕にこう切り出した。

「今日は俺の家で一緒に食べませんか？　萌黄さんのお母さんも来るみたいです」
「あ、そうなんだ。じゃ、じゃあ、お邪魔しようかな？」
「どうぞどうぞ、むさ苦しい所ですが」

心がルンルンと踊るがそれを顔には出さず何ともない感じで彼の家にお邪魔する。久しぶりの彼の自宅。前は二人きりで留守番とかもしたなとしみじみとしてしまう。

「流石に洗濯物は我が家の洗濯機に入れちゃってください」
「あ、うん」

この家の洗濯機の場所は知っているのでそこに向かっている途中で自身のスマホが

振動する。お母さんからのメールであった。

『ごめん、母親同士で外食してくるから子供同士で夕飯食べて』

お、おおおお、お母さん!?　これは粋な計らいとして感謝するべきなのだろうか。それとも嵌められたと悔しがるべきなのだろうか。そもそもこの後はどうるべきなのか。

頭の中にぐるぐると思考の渦ができる。取りあえず夕食を支度をして、一緒にテレビ見て……あわよくば彼から告白をとそんな考えを持ちながらリビングに向かう。

丁度彼もスマホを持っており、事情を把握したような顔をしていた。

「ふ、二人きりみたいですね……」

「あ、うん」

「えっと、外に食べに行きます?」

「僕が作るよ」

「あ、はい。お願いします……」

何だろう、このぎこちない会話は。踏み込みたいのに踏み込めないこの感じは。もどかしくて不機嫌になりそうだ。早く、少しでも早く特別な関係になってデートとか、手

を繋ぐとかしたいのに。

どうして、告白をしてくれないの？　こっちはこんなに待って居るのに。

もしかして、僕の事が嫌いなの？　でかい女は嫌なの？

僕から言ってしまいたい。でも、言えない。彼から告白をしてほしいと言う気持ちは本当だ。だけど、もう一つの理由は僕から告白して断られるのが怖いんだ。

少しずつ距離が離れて、それが寂しくていやだ。でも、ここで自分から踏み込んで拒絶されたらと考えると怖くて怖くて仕方ない。だから、只管に待ちに徹した。安全な方法だから。

でも、こんな二人きりの場面でも何もしてこない。毎日、メールしたりもしてるけど告白してこない。本当は分かっていたんだ。彼が僕を好きでないなんて。だけど、期待してしまった。

でも……そっか……僕の勘違いだったんだ。彼は僕の事なんか友達位にしか思ってないんだ……

恥ずかしいな。変に勘違いして。変に期待して。まぁ、別に友達でもいいかな？　それだけでも楽しいだろうし。

「萌黄先輩？　大丈夫ですかッ？　どこか痛いですか？」

「ああ、うん、ごめん。大丈夫。可笑しくて笑ちゃった……ッ」

自分の馬鹿さ加減がどうにも可笑しくてつい、笑ってしまった。笑いすぎて涙があふれるくらいに笑ってしまった。

「……」

「あはは、ごめんごめん。夕食カレー作るから、ちょっと待ってて？」

涙を拭いて逃げるように僕はキッチンに向かう。だけど、キッチンには行けなかった。彼が僕の手を掴んだから。

「あの、その……何か悩みとか、あるんだったら、俺が聞きます」

「や、やだなー、何も無いよ？」

「いえ、きっとある気がします……しかも、俺に原因がある気がします……」

「それは自意識過剰じゃないかな？」

「そうだったら、滅茶苦茶恥ずかしいですけど!!　死んでしまいたい位に恥ずかしいですけど!!　あの!!　その!!」

彼は急に意を決したように僕を見上げる。その強い瞳と声にドキッと心臓が跳ねる。

「もしかして！　俺の事好きですか!!??」

「あ、え……」

「もう、本当にこれが違うなんてことがございましたら切腹する位の事なんですけど！

萌黄先輩は俺の事が好きなんじゃないかと思ってしまっています!!!」

「……えっと」

「実は俺も先輩の事が好きでして!!　でも、違うなんてことがあったら恥ずかしくて、普通にキモいし、嫌われるかもしれないと思っていたんですけど!!　どうか、俺と付き合ってくださいませんでしょうか!!??」

流れるような土下座を彼はして額を打ち付ける。突然の事で理解が及ばない。でも、自然と涙が再び溢れてしまう。

「あれ!?　もしかして、気持ち悪すぎて涙が……」

「ち、違うよ！　う、嬉しくて！」
「え？　嬉しいんですか？」
「は、はい……」
「じゃあ……」
　彼が期待をするよな目で僕を見る。それが少し嬉しくて、特別な関係になれたことがとんでもなく嬉しくて。顔が熱い。
　なんて言うのが完璧な回答可分からないけど、取りあえず言う事を言ってしまうと思った。

「こんな不束者で良ければ、よろしくお願いします……」
「ありがとうございます!!」
「ちょ、ちょっと額をそんなに床に打ち付けないでよ！　怪我したらどうするの！」
　彼が強く額を打ち付ける。危ないので僕も膝を床につけて彼のでこを撫でながら注意をする。
「す、すいません、癖で」
「どんな癖!?」

彼の言動に思わずツッコミをしてしまう。それが面白くて再び笑顔になる。そんな僕を見て彼もぎこちない笑みを見せる。

「こんなことをいきなり言うのはあれなんですけど。海にデート行きませんか？」
「いや、本当にいきなり過ぎない？」
「すいません！」
「まぁ、僕も水着は買ってあるけどさ……」
「ま、マジですか！」
彼との夏で何か進展があるかもしれないと思って一応水着は買っておいたのだ。
「じゃあ、行きましょう！」
「う、うん……」

急に愛に溢れたのか、ガツガツしながらこちらにアピールする彼。なんだか僕が年上なのにリードされて悔しい気もする。ちょっと、照れさせたい……

「えっと……君の事、十六夜って呼んでもいいかな？」
「寧ろ、それでお願いします。ご唱和ください我の名を」

「あ、うん……」

何か、メンタル極まってるな……これからも彼の愛情表現に顔を赤くすることは何度もあるのだがそれは別の話。

―